

か

ざ

ぐ

る

ま



熱気と感動―手塚治虫さんのこと

E2 池田 知隆（ジャーナリスト）

「アトムは最初、女の子だったんです」ー。ベレー帽姿の手塚治虫さんは「鉄腕アトム」の秘密をいかにも愉快そうに私に打ち明けてくれた。「だって、あのパツチリした目、スラリとした脚の線はタカラヅカの男役と同じでしょう」

スピルバーグの映画「未知との遭遇」の試写会の前、一時間だけ時間を割きましよう、と帝国ホテルのロビーでインタビュールにに応じてくれた。半世紀近い昔、タカラヅカで「ベルサイユのばら」の大ブームが沸き起こっていたころだった。

「実はね、宝塚歌劇のアマチュアリズムはまさにボクなんです」

「えっ、どういうことですか？」

「ボクは絵がヘタだと言われた。自分でもそれはわかっているし、だからこそ、一所懸命にやるし、常に努力をしてきた」

「いやいや、そんな、ヘタだなんて……」

「そうなんですよ。でも、上手になつて、枯淡の境地に入れば、いつしかおさまりかえり、ウマイというたつた一言で終わってしまう。うまくなるう、うまくなるうと挑戦していく〈熱気〉こそが人を感動させるのであって、かろうじてボクの漫画が戦後ずっと読まれてきたとすれば、人氣の秘密はここにあるんですよ」

美しい構図の絵を見ても、それだけでは人を感動しない。手塚さんは、人が人の心を打つのは「よくがんばっているなあ」という作品ににじむ熱い思いにある、というのだ。女性たちに人氣の「ベルばら」は舞台で動く劇画。そのルーツは戦後のストーリーリ漫画を切り拓いた手塚漫画だった。軍国調の波が押し寄せたとき、手塚少年は宝塚ファミリーランド（遊園地）で遊び、「ユートピア」の世界をはぐくんだ。宝塚―手塚―劇画―宝塚の見事な円環があった。

それらを貫いているのは人間の〈熱気〉なのだ。あのと、生きていく上で大切なことを教えてもらった、と深い感銘を受けた。いま、どこかクールなAI（人工知能）が世界を覆いつくそうとしている。「おーい、君も、何歳になつても〈熱気〉を失っちゃだめだよ」。天空からそんな手塚さんの人懐っこい声が聞こえてくる。